

2019 年度三田図書館・情報学会研究大会ラウンドテーブル
「社会科学領域における研究データの公開と共有：図書館情報学での実践に向けて」

【趣旨】

研究データの公開と共有に関する議論は、それらを包括する概念であるオープンサイエンスに関するものも含めて、最近急激に盛んになってきています。自然科学領域に関しては、オープンサイエンスに関する政策などが遅れているとされる日本においてさえ、第5期科学技術基本計画に盛り込まれるなど、その推進に向けて具体的な議論がなされ始めています。また、人文学に関してはデジタル・ヒューマニティーズという新しい研究領域の出現として、関心の高まりがみられます。

社会科学領域においては、昔から各種統計データの利用と分析が研究実践の一部として位置づけられており、研究者による個別の調査(survey)データの共有と公開を行う機関としては、米国の The Inter-university Consortium for Political and Social Research(ICPSR)やドイツの GESIS 内にある Data Archive for Social Sciences (DAS)などが既に長い歴史を持っています。図書館情報学は多様な方法を採用する研究領域ですが、図書館利用に関する質問紙調査、一般市民の情報行動を対象としたサーベイは代表的な研究手法だと言えるのではないのでしょうか。しかし、研究データの公開や共有に関してはほとんど議論がなされてきませんでした。

そこで本年度のラウンドテーブルでは、図書館情報学領域と密接な関係がある社会科学領域における研究データの共有と公開に注目し、現在のオープンサイエンス、研究データのオープン化という新しい文脈において、従来からの活動がどのように位置づけられ、今後どのように広がっていくのかについて情報共有し、その動きを我が身に引きつけて考えてみることを目的としたいと思います。話題提供の視点としては、次の3点を考えています。

- ① 社会科学領域における研究データの公開と共有に関する国際動向(欧米諸国において研究データの公開や共有がどのようになされているのか、ライブラリアンがそこにどのように関わっているのか)について
- ② 昨年度開始された日本学術振興会「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」などにみられる我が国の政策動向について
- ③ 上記事業の拠点機関における研究データの公開と共有を実現するための活動の現状と課題について

以上のような観点からの情報提供を通じて、図書館情報学の研究者および実践に携わる人々が、どのような形でこれらの取り組みに関与することができるのかについて、考えてみたいと思います。

【話題提供者】

前田幸男氏(東京大学大学院情報学環・教授)

石井加代子氏(慶應義塾大学経済学部・特任准教授, 経済学部附属経済研究所パネルデータ設計・解析センター)

酒井由紀子氏(東京財団政策研究所・政策データラボ シニアマネージャー)

【モデレータ】

松林麻実子(筑波大学図書館情報メディア系・講師)